エレミヤ書15－17章「主の前に立つ預言者」

1A 預言者の心痛む祈り 15

1B 剣による破壊 1－9

2B 敵からの救い 10－21

2A 人との関わりの制限 16

1B 共同体からの離別 1－9

2B 神々から主への立ち帰り 10－21

3A 神の聖所 17

1B 心深くの罪 1－18

1C 偶像礼拝の心 1－13

2C 主の預言者への迫害 14－18

2B 安息日の保持 19－27

本文

エレミヤ書 15 章からです。私たちは前回で、エレミヤが必死の祈りをユダの民のために捧げている姿を見ることができました。日照りが続いて、ユダの国に水が枯渇して苦しむという預言を行なっても、人々は聞く耳を持たず、むしろ多くの預言者が、「剣や飢饉がこの国に起こらない。」と預言していました。けれども、主は必ずそれは起こり、彼らにも降りかかると語られました。それでエレミヤは必死に祈ります。どうか、彼らを退けないでください、辱めないでください、契約を覚えてくださいと祈っています。けれども、主はその祈りを聞かないとはっきりと語られます。

1A 預言者の心痛む祈り 15

1B 剣による破壊 1－9

15:1 主は私に仰せられた。「たといモーセとサムエルがわたしの前に立っても、わたしはこの民を顧みない。彼らをわたしの前から追い出し、立ち去らせよ。

先週お話ししましたように、二人とも、神の前に出て執り成しをしたことによって、御怒りが民に下らなかった証しを持っています。けれども、たとえ彼らが来ても、その怒りの手は変えることはないと主は言われます。なぜか？悔い改めないからです。悔い改めは、人に強制されてするものではありません。神の慈しみに触れて、神が正しい方、良い方であることを信じ、自らこの方に近づくことです。ゆえに、神であっても、彼らがご自分に立ち帰るのを待つしかできないのです。

15:2 彼らがあなたに、『どこへ去ろうか。』と言うなら、あなたは彼らに言え。『主はこう仰せられる。死に定められた者は死に、剣に定められた者は剣に、ききんに定められた者はききんに、とりこに定められた者はとりこに。』15:3 わたしは四つの種類のもので彼らを罰する。・・主の御告げ。・・

すなわち、切り殺すために剣、引きずるために犬、食い尽くし、滅ぼすために空の鳥と地の獣である。

民の反応が既に、エレミヤの預言が聞かれていないことを表しています。「どこへ去ろうか。」と言って、全く本気に考えていません。そこで主は、これから起こることの痛ましい現実をお語りになります。死、つまり疫病による死か、剣で殺されるか、飢饉で死ぬか、そして生き残ったものは捕虜となるか、この四つしかありません。これらは決して真新しい考えではなく、主が律法を与えられた初めからイスラエルの民に語られていたものでした（レビ 26:23-26）。

15:4 わたしは彼らを、地のすべての王国のおののきとする。ユダの王ヒゼキヤの子マナセがエルサレムで行なったことのためである。15:5 エルサレムよ。いったい、だれがおまえをあわれもう。だれがおまえのために嘆こう。だれが立ち寄って、おまえの安否を尋ねよう。15:6 おまえがわたしを捨てたのだ、・・主の御告げ。・・おまえはわたしに背を向けた。わたしはおまえに手を伸ばし、おまえを滅ぼす。わたしはあわれむのに飽いた。

彼らの身に起こることは、世界中の人々に「おののき」を与えます。これはちょうど、原爆の被害であるとか、そしてホロコーストそのものがそうですね。バビロン捕囚において、そのような慄きをもたらします。そして、主は「だれがおまえをあわれもう。」と言われます。あまりにも悲惨なので、「かわいそう」と思う領域を超えてしまい、憐れみを受けることができません。

それを神が決められたのは、「マナセがエルサレムで行なったこと」のためでした。そのマナセの行なったことは、列王記第二 21 章、歴代誌第二 33 章の中で詳しく読むことができますが、異邦人の慣わしをまねて、それを神殿の敷地やエルサレムにも持ち込み、さらにそれをユダヤ人にも行なわせたというところにあります。幼子を火に通すようなことまで来ました。そこで憐れみ深く、怒るに遅い主が、この町を一度滅ぼすことをお決めになったのです。主は、「わたしはあわれむのに飽いた。」とも言われます。主は誰も滅びるのを望んでおられない、悔い改める者を救うことを考えておられます。けれども、主は罪に対して、悪に対してそのままにしていく方ではありません。罰しなければいけない方です。そしてマナセの時に、主はその決断を心の中で行われたのでした。

15:7 わたしはこの国の町囲みのうちで、熊手で彼らを追い散らし、彼らの子を失わせ、わたしの民を滅ぼした。彼らがその行ないを悔い改めなかったからだ。15:8 わたしはそのやもめの数を海の砂よりも多くした。わたしは若い男の母親に対し、真昼に荒らす者を送り、にわかに、苦痛と恐怖を彼女の上に襲わせた。15:9 七人の子を産んだ女は打ちしおれ、その息はあえいだ。彼女の太陽は、まだ昼のうちに没し、彼女は恥を見、はずかしめを受けた。また、わたしは、彼らの残りの者を彼らの敵の前で剣に渡す。・・主の御告げ。・・」

この破壊の凄まじさは、寡の数を増やすことで示されます。つまり、バビロンに抵抗する男たち

がことごとく剣にかけられ、殺されるからです。また、母親も息子たちを失い、絶望の中で打ちひしがれます。このことと、イエス様が十字架の道を歩まれていた時に、女たちに言った言葉が似ています。「しかしイエスは、女たちのほうに向いて、こう言われた。「ルカ 23:28-29 エルサレムの娘たち。わたしのことで泣いてはいけない。むしろ自分自身と、自分の子どもたちのことのために泣きなさい。なぜなら人々が、『不妊の女、子を産んだことのない胎、飲ませたことのない乳房は、幸いだ。』と言う日が来るのですから。」かつてユダヤ人がエレミヤの言葉を拒み、女たちが嘆いたように、イエス様を拒み、それでローマによってエルサレムが破壊され、女たちが泣きました。

2B 敵からの救い 10－21

15:10 ああ、悲しいことだ。私の母が私を産んだので、私は国中の争いの相手、けんかの相手となっている。私は貸したことも、借りたこともないのに、みな、私をのろっている。15:11 主は仰せられた。「必ずわたしはあなたを解き放って、しあわせにする。必ずわたしは、わざわいの時、苦難の時に、敵があなたにとりなしを頼むようにする。

エレミヤは、自分がその預言の言葉によって、民から争いの的となっており、恨まれていました。そこである意味、彼は自分が生まれてきたことを嘆いています。「私の母が私を産んだので」と言っています。しかし主が慰められます。必ずこの状態から解き放ち、幸せにすると言われます。そして、「敵があなたにとりなしを頼むようにする」と言われますが、これは起こります。エルサレムが破壊された後、僅かに残っているユダヤ人がこれからどうすればよいか、伺いを主に立ててくださいとお願する場面が後半に出てきます（42:2）。

15:12 だれが鉄、北からの鉄や青銅を砕くことができようか。15:13 わたしは、あなたの財宝、あなたの宝物を獲物として、ただで引き渡す。それは、あなたの国中で、あなたが犯した罪のためだ。15:14 わたしはあなたをあなたの知らない国で敵に仕えさせる。わたしの怒りによって火がつき、あなたがたに向かって燃えるからだ。」

バビロンがエルサレムを破壊する時に、神殿からの財宝を奪い取ります。つまり、この背後には、彼らが破壊される直前まで富を持っていたことを意味し、その富に彼らが拠り頼んでいたことを意味します。

15:15 主よ。あなたはご存じです。私を思い出し、私を顧み、私を追う者たちに復讐してください。あなたの御怒りをおそくして、私を取り去らないでください。私があなたのためにそしりを受けているのを、知ってください。15:16 私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました。あなたのみことばは、私にとって楽しみとなり、心の喜びとなりました。万軍の神、主よ。私にはあなたの名がつけられているからです。15:17 私は、戯れる者たちの集まりにすわったことも、こおどりして喜んだこともありません。私はあなたの御手によって、ひとりすわっていました。あなたが憤りで私を満たされたからです。15:18 なぜ、私の痛みはいつまでも続き、私の打ち傷は直らず、いえようと

もしないのでしょう。あなたは、私にとって、欺く者、当てにならない小川のようになられるのですか。

主が、エルサレム破壊の預言をエレミヤに行わせても、エレミヤ自身はあまりにも辛くて、その預言を遮るかのように、主に訴えています。エレミヤを追う者たちがいて、その仕業に対して報いてくださいとお願しています。そして、そうした祈りに織り交ぜるように、彼は主との親密な関係の中に入っています。16 節に、御言葉を喜びとしていること、神の御名が自分に付けられていることを話していますね。主との語らいがこれだけ慕わしいのですが、ところが人々の所に出ると、全く御言葉を度外視している人々がいます。非常に厄介なことに、神殿礼拝は守っていますから、それが彼らが悔い改めなさせなくなる原因にもなっており、それでエレミヤは彼らのところにいれなくなります。憤りに満たされています。それで主に対して、自分は傷を負っていて、あなたは約束の通り自分を救っておられないと不平を鳴らしているのです。

15:19 それゆえ、主はこう仰せられた。「もし、あなたが帰って来るなら、わたしはあなたを帰らせ、わたしの前に立たせよう。もし、あなたが、卑しいことではなく、尊いことを言うなら、あなたはわたしの口のようになる。彼らがあなたのところに帰ることがあっても、あなたは彼らのところに帰ってはならない。15:20 わたしはあなたを、この民に対し、堅固な青銅の城壁とする。彼らは、あなたと戦っても、勝てない。わたしがあなたとともにいて、あなたを救い、あなたを助け出すからだ。・・主の御告げ。・・15:21 また、わたしは、あなたを悪人どもの手から救い出し、横暴な者たちの手から助け出す。」

主が、エレミヤを優しく正しています。エレミヤは主の言葉を語るのに疲れてしまい、それでそのような葛藤を抱かないように、語るのをやめるかどうかということも考えていたのではないかと思います。少し神から離れたいという思いがあったのでしょう、それでわたしのところに帰りなさいと言われます。そして、再び不平のような卑しい言葉ではなく、神ご自身の尊い言葉を与えてくださいます。そして、迫害する彼らからエレミヤを守ること、救うことも約束しておられます。

2A 人との関わりの制限 16

主はさらに、ご自分の前に立つエレミヤを、厳しい状況の中で預言をさせていかれます。

1B 共同体からの離別 1－9

16:1 次のような主のことばが私にあった。16:2「あなたは妻をめとるな。またこの所で、息子や娘を持つな。」16:3 まことに、主は、この所で生まれる息子や娘につき、また、この国で、彼らを産む母親たちや、彼らを生ませる父親たちについて、こう仰せられる。16:4「彼らはひどい病気で死ぬ。彼らはいたみ悲しまれることなく、葬られることもなく、地面の肥やしとなる。また、剣とききんで滅ぼされ、しかばねは空の鳥や地の獣のえじきとなる。」

主は、エレミヤに再び実演による預言を命じられます。それは何と、独身で生きなさいというもの

です。妻を娶らず、ゆえに子供も生まれません。それは、後にバビロンによって攻められる時に、妻や子供がただ殺され、死体は地面に転がったままになるというような惨状になるので、それこの危急の時、切迫した時に結婚をしないということを示していました。しかし、ユダヤ人共同体においてのエレミヤの行動は、あまりにも苛酷なことでした。主は人に対して、生めよ、増えよと命じられ、またアブラハムの子孫として、子孫が星の数のようになると言われて、それでユダヤ人にとっては結婚は祝福の命令に従うものでありました。それで、独身者のままでいるということは、まずありえないことであります。

16:5 まことに主はこう仰せられる。「あなたは、服喪中の家にはいってはならない。悼みに行ってはならない。彼らのために嘆いてはならない。わたしはこの民から、わたしの平安と、・・主の御告げ。・・いつくしみと、あわれみとを取り去った。16:6 この国の身分の高い者や低い者が死んでも葬られず、だれも彼らをいたみ悲しまず、彼らのために身を傷つけず、髪もそらない。16:7 だれも、死んだ者を悔やむために葬儀に出て、パンを裂くこともなく、その父や母を慰める杯を彼らに飲ませることもないだろう。16:8 あなたは宴会の家に行き、いっしょにすわって食べたり飲んだりしてはならない。」16:9 まことにイスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。「見よ。わたしは、この所から、あなたがたの目の前で、あなたがたが生きているうちに、楽しみの声と喜びの声、花婿の声と花嫁の声を絶やす。

結婚だけでなく葬式も、参加するなと命じておられます。これは、後にバビロンによって剣に倒れる時に、その死体が転がったままになります。葬って、嘆き悲しむことさえできない、そのような恐ろしいことが起こることを前もって知らせるためでした。葬儀に出ないということもまた、苛酷なことでした。葬儀においては、わざわざ泣いてくれる人を雇う程であり、十分にその人の死を悼み悲しむようにされています。そして飲んだり食べたりするのも、人々とのつながりを保つのに重要な出来事です。これらにエレミヤが参加しないことによって、そこで彼らがなぜ？と尋ねてくるのを待っている、という預言です。けれども、日常生活に関わらない、ユダヤ人の共同体にとっての大事な部分に関わらないというのは、とても辛かったろうと思います。

しかし、それが、エレミヤが主の前に立つ使命でありました。彼らが聞き従わないので、そうしたことでもしないと注意が引き寄せられないのを神はご存知で、それでエレミヤにそのようなことをされました。イエス様も十字架を見据えてエルサレムに向かわれる時に、弟子になりたい、けれども父を葬ることを許してくださいと言ってきた人に対してこう言われました。「死人たちに彼らの中の死人たちを葬らせなさい。あなたは出て行って、神の国を言い広めなさい。（ルカ 9:60）」それから、イエス様は終わりの日には、ここで書かれているような冠婚葬祭がなくなってしまう日になることを警告しておられます。「マタイ 24:37-39 人の子が来るのは、ちょうど、ノアの日のようだからです。洪水前の日々は、ノアが箱舟にはいるその日まで、人々は、飲んだり、食べたり、めとったり、とついだりしていました。そして、洪水が来てすべての物をさらってしまうまで、彼らはわからなかったのです。人の子が来るのも、そのとおりです。」

2B　神々から主への立ち帰り　10－21

16:10 あなたがこの民にこのすべてのことばを告げるとき、彼らがあなたに、『なぜ、主は私たちに、この大きなわざわいを語られたのか。私たちの咎とは何か。私たちの神、主に犯したという、私たちの罪とは何か。』と尋ねたら、16:11 あなたは彼らにこう言え。『あなたがたの先祖がわたしを捨て、・・主の御告げ。・・ほかの神々に従い、これに仕え、これを拝み、わたしを捨てて、わたしの律法を守らなかったためだ。16:12 また、あなたがた自身、あなたがたの先祖以上に悪事を働き、しかも、おのおの悪い、かたくなな心のままに歩み、わたしに聞き従わないので、16:13 わたしはあなたがたをこの国から投げ出して、あなたがたも、先祖も知らなかった国へ行かせる。あなたがたは、そこで日夜、ほかの神々に仕える。わたしはあなたがたに、いつくしみを施さない。』

ようやく聞く耳を少しだけ持ってくれている人々に対して、語られた言葉です。大きな災いが来ると主が語られたのであれば、どれほどの罪を私たちが犯したと言うのか？ということです。先ほど話しましたように、この災いについては真新しいことではなく、まさにモーセが律法の中で預言として語っていたことであります。私たちも預言的な働きをしています。何度も何度も、人々は同じ質問をしてくるでしょう。その度に、すでに聖書に書かれていることです、と忍耐して教えます。

そしてその中身は「他の神々に従っている」ことです。そして、これまでの先祖が犯した罪だけでなく、むしろ今はマナセ王から始まって、先祖以上に犯しています。そして、神は彼らにふさわしいところに連れて行かれます。その神々が拝まれている発祥地、異邦の国々に捕え移されるということです。私たちも同じです、主に仕えていると言いながら、主ご自身よりも大事なものを持っているなら、そのままの状態でいることはできません。その大事なことが自分を支配して、主から完全に離れてしまうという悲劇を招きます。

16:14 それゆえ、見よ、その日が来る。・・主の御告げ。・・その日にはもはや、『イスラエルの子らをエジプトの国から上らせた主は生きておられる。』とは言わないで、16:15 ただ『イスラエルの子らを北の国や、彼らの散らされたすべての地方から上らせた主は生きておられる。』と言うようになる。わたしは彼らの先祖に与えた彼らの土地に彼らを帰らせる。

ここで主は初めて、回復の啓示を見せておられます。これまでエルサレムが破壊するというメセージで終わっていましたが、それを完了すれば、私は第二の出エジプトを与えると言われています。イスラエルが民族として誕生したのは、エジプトから連れ出されたことによってでした。そして、バビロンから解放されて、エルサレムに帰還することは、彼らにとっての云わば、第二の誕生、再び生まれることを意味します。ですから私たちはここに、希望があります。私たちもまた、新たないのちの中に生かされています。それは、自分がバビロンに捕え移される、つまり自分の古い人は罪の中で死んでしまっているのだ、ということを認めるところから始まります。

16:16 見よ。わたしは多くの漁夫をやって、・・主の御告げ。・・彼らをすなどらせる。その後、わた

しは多くの狩人をやって、すべての山、すべての丘、岩の割れ目から彼らをかり出させる。16:17 わたしの目は彼らのすべての行ないを見ているからだ。彼らはわたしの前から隠れることはできない。また、彼らの咎もわたしの目の前から隠されはしない。16:18 わたしはまず、彼らの咎と罪に対し二倍の報復をする。それは彼らがわたしの国を忌むべきもののしかばねで汚し、忌みきらうべきものを、わたしの与えた相続地に、満たしたからである。」

ここで主が強調されているのは、「隠れたところで犯している罪であっても、その罪に対する裁きは必ずある。」ということです。どんなにごまかしても、裁きから免れることはできない、すべてが明らかにされる、ということです。「造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。（ヘブル 4:13）」とあるとおりです。漁夫や狩人のように、隅々までバビロンによる裁きが及びます。そして、彼らが密かに行なっていた偶像礼拝がみな暴かれる形となります。そして、彼らが葬られることもなく死に絶えるのですが、それは彼らが偶像でこの相続地を汚したからでした。

16:19 主よ、私の力、私のとりで、苦難の日の私の逃げ場よ。あなたのもとに、諸国の民は地の果てから来て言うでしょう。「私たちの先祖が受け継いだものは、ただ偽るもの、何の役にも立たないむなしいものばかりだった。16:20 人間は、自分のために神々を造れようか。そんなものは神ではない。」と。16:21 「だから、見よ、わたしは彼らに知らせる。今度こそ彼らに、わたしの手と、わたしの力を知らせる。彼らは、わたしの名が主であることを知る。」

先に、主は捕え移されるユダヤ人が回復する、エルサレムに帰還する約束を下さいました。そして今は、異邦人がまことの神に立ち帰る約束を与えてくださっています。主は、イエス・キリストによってその働きを既に御霊によって始めてくださっており、現在進行形で行なっておられます。パウロがテサロニケ人たちに、「あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり・・（1テサロニケ 1:9）」と言いました。

3A 神の聖所 17

1B 心深くの罪 1－18

1C 偶像礼拝の心 1－13

そして主は、ユダヤ人らの心奥深くに到達してしまった、罪について語り始められます。

17:1 ユダの罪は鉄の筆と金剛石のとがりでしるされ、彼らの心の板と彼らの祭壇の角に刻まれている。17:2 彼らの子たちまで、その祭壇や、高い丘の茂った木のほとりにあるアシェラ像を覚えているほどだ。

「金剛石」は新共同訳では「ダイヤモンド」と訳されています。祭壇の青銅に刻まなければいけないので、それよりも硬いものでなければいけません。それだけ深く、彼らの罪が心の板に刻み込ま

れています。そして、偶像礼拝をしている時の祭壇に、主への祭壇だけでなく、偶像礼拝にも祭壇には四隅に角があったのでしょう。そこに彼らの罪が刻み込まれています。「アシェラ像」とあります、これは豊穣の女神でカナン人が拝んでいました。マナセはそれを、神殿の敷地内に置いていました（2列王 21:7）。

17:3 野にあるわたしの山よ。わたしは、あなたの財宝、すべての宝物を、獲物として引き渡す。あなたの国中にある高き所の罪のために。17:4 あなたは、わたしが与えたあなたの相続地を、手放さなければならない。また、わたしは、あなたの知らない国で、あなたを敵に仕えさせる。あなたがたが、わたしの怒りに火をつけたので、それはとこしえまでも燃えよう。

主は、15 章 13 節でも語られていたように、「あなたの財宝、すべての宝物」を引き渡す、と言われています。これはエルサレムの神殿の財宝でもあるし、また彼らが富にも頼っていたことを指しています。そうです、偶像礼拝というのは私たちの罪の根っこにあります。自分が生ける神以外のものに頼っている、依存していることが偶像礼拝の始まりです。結局、自分に仕えている、自分を神としているのですが、都合の良い時だけ神にも頼るということをしています。そこで、偶像礼拝をしている時には、富にも頼っていることが多くあります。富がない時には、主のみが頼るべきお方であることが分かるのですが、富がある時に、自分自身でいろんなことができてしまうため、それで神のみに頼る必要性を感じなくなるからです。

17:5 主はこう仰せられる。「人間に信頼し、肉を自分の腕とし、心が主から離れる者はのろわれよ。17:6 そのような者は荒地のむろの木のように、しあわせが訪れても会うことはなく、荒野の溶岩地帯、住む者のない塩地に住む。17:7 主に信頼し、主を頼みとする者に祝福があるように。17:8 その人は、水のほとりに植わった木のように、流れのほとりに根を伸ばし、暑さが来ても暑さを知らず、葉は茂って、日照りの年にも心配なく、いつまでも実をみのらせる。

ユダの国は、人間の力にも頼っていました。ヨシヤが死んだ後に、エジプトがユダを従えました。けれどもバビロンが台頭しました。ユダの王エホヤキムはバビロンに従属しましたが、エジプトが一度ネブカデネザルを追い返したのを見て、反逆したのです（2列王 24:1）。そして最後の王、ゼデキヤもありもしないエジプトからの助けを期待するという夢想を描いていて、バビロンに反逆し、それでエルサレムが破壊され、バビロンに捕え移されるのです。このように人に頼ることも、偶像礼拝に関わります。神以外に頼っているものがあれば、それが偶像ですから、人に依存することも偶像です。もちろん、私たちは互いに必要です。けれども、神から与えられた交わりであり、その交わりそのものが第一となってはいけないのです。あくまでも神の礼拝が第一であり、それから互いに交わりであり、人との関係であります。

そして、ここでエレミヤは人への依存ではない、神への信頼を語っています。ここにある、水のほとりに植えられた木というのは、まさに詩篇1篇の初めのところに、幸いな人として出てくる人の姿

であります。エレミヤは先にも、みことばを楽しんでいる自分自身の姿を書いていました。そして、今は、主だけに信頼することを話しています。このようにしてエレミヤは、主の前に立つということを行なっていました。その中で、あまりにもかけ離れたユダヤ社会があったわけで、そこと主との交わりの間にとてつもない葛藤と衝突があったのです。

17:9 人の心は何よりも陰険で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう。17:10 わたし、主が心を探り、思いを調べ、それぞれその生き方により、行ないの結ぶ実によって報いる。

午前の礼拝でお話ししたとおりですが、私たちは自分の心を隠しながら、生きていく罪の性質を持っています。表向きはきれいにしていく偽善の罪を持っています。そのごまかし方は巧妙であり、そこで「何よりも陰険」という言葉が使われているのです。けれども、主は必ず明らかにされます。「行ないの結ぶ実」とあるように明らかにされます。教会の中において、パウロがテモテに語っている言葉があります。「1テモテ 5:24-25 ある人たちの罪は、それがさばきを受ける前から、だれの目にも明らかですが、ある人たちの罪は、あとで明らかになります。同じように、良い行ないは、だれの目にも明らかですが、そうでないばあいでも、いつまでも隠れたままでいることはありません。」

17:11 しゃこが自分で産まなかった卵を抱くように、公義によらないで富を得る者がある。彼の一生の半ばで、富が彼を置き去りにし、そのすえはしれ者となる。」

しゃこは、鳥の一種です。キジとウズラの中間のような体形をしています。自分で働いて得た富に捕まっている時に、このように富は富んでいってしまう、ということです。箴言には、数多くこの格言がありました。勤勉に働くことによる収入と、そうではない富の違いです。

17:12 私たちの聖所のある所は、初めから高く上げられた栄光の王座である。17:13 イスラエルの望みである主よ。あなたを捨てる者は、みな恥を見ます。「わたしから離れ去る者は、地にその名がしるされる。いのちの水の泉、主を捨てたからだ。」

これで三回目です。エレミヤが、御言葉を楽しみにしている姿、そして主に信頼している姿、そして、主のおられる聖所を仰ぎ見ている姿です。ユダの民に何がなくなっていたかというと、こうしたまことの主への礼拝、主との交わりであったのです。この方に拠りすがることを忘れてしまいました。そしてエレミヤ書の最初にありましたが、「いのちの水の泉、主を捨てた」ということを行なっています。そして壊れた水溜から水を飲んでいます。私たちにある、心の板に刻まれた罪をどのようにして取り除くのか？一にも二にも、主への礼拝であります。「2コリント 3:16-18 しかし、人が主に向くなら、そのおおいは取り除かれるのです。主は御霊です。そして、主の御霊のあるところには自由があります。私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」

2C 主の預言者への迫害 14－18

17:14 私をいやしてください。主よ。そうすれば、私はいえましょう。私をお救いください。そうすれば、私は救われます。あなたこそ、私の賛美だからです。

エレミヤが、迫害者、中傷者についての祈りを再び始めます。彼は主への賛美、礼拝から始めています。

17:15 ああ、彼らは私に言っています。「主のことばはどこへ行ったのか。さあ、それを来させよ。」17:16 しかし、私は、あなたに従う牧者となることを、避けたことはありません。私は、いやされない日を望んだこともありません。あなたは、私のくちびるから出るものは、あなたの御前にあるのをご存じです。17:17 私を恐れさせないでください。あなたは、わざわいの日の、私の身の避け所です。17:18 私に追い迫る者たちが恥を見、私が恥を見ないようにしてください。彼らがうろたえ、私がうろたえないようにしてください。彼らの上にわざわいの日を来たらせ、破れを倍にして、彼らを打ち破ってください。

「主のことばはどこへ行ったのか。さあ、それを来させよ。」というのは、「お前は、神の言葉を教えているが、ただそれだけじゃないか。現実の生活、実際の生活には見えないではないか。きれいごとばかり言って。」というものです。しかしそこでエレミヤは叫びます。「しかし、私は、あなたに従う牧者となることを、避けたことはありません。」牧者として何が最も大切か、主に従うことです。それから、「私は、いやされない日を望んだこともありません。」と言っていますが、これはユダの民が癒されないことを望んだことは一つもない、ということです。御言葉を語り、その聞いている人が癒されないことなど望んだなどありません。それから、「あなたは、私のくちびるから出るものは、あなたの御前にあるのをご存じです。」とあります。そうです、これは恐ろしいほどの責任です。ここから語られるものが、自分の思いのものであってはならない、ということです。自分の思いであれば、聖なる御言葉を汚しています。

そしてエレミヤは、自分の恐れについて主に祈っています。その迫害する者たちについて、彼らの悪い仕業によって、主の働きをやめてしまうことがないように祈っています。

2B 安息日の保持 19－27

そして次にまた別の短い説教があります。

17:19 主は私にこう仰せられる。「行って、ユダの王たちが出入りする、この民の子らの門と、エルサレムのすべての門に立ち、17:20 彼らに言え。これらの門のうちにはいるユダの王たち、ユダ全体、エルサレムの全住民よ。主のことばを聞け。17:21 主はこう仰せられる。『あなたがた自身、気をつけて、安息日に荷物を運ぶな。また、それをエルサレムの門のうちに持ち込むな。17:22 また、安息日に荷物を家から出すな。何の仕事もするな。わたしがあなたがたの先祖に命じたとおり

に安息日をきよく保て。17:23 しかし、彼らは聞かず、耳も傾けず、うなじのこわい者となって聞こうとせず、懲らしめを受けなかった。

エレミヤの時代、神殿礼拝は行なわれていましたが、そこで同時に商売なども行なわれていたようです。安息日を守り、それを聖なるものとするというのは、そこで主が全ての働きを終えられた、完成されたことを記念するものです。したがって、彼らは安息日を守る度に、主を認めて、主が全てのことを成し遂げられたことを認め、その中に休みます。私たちがしていることではなく、神がしていることなのです。

17:24 もし、あなたがたが、ほんとうにわたしに聞き従い、・・主の御告げ。・・安息日にこの町の門のうちに荷物を持ち込まず、安息日をきよく保ち、この日に何の仕事もしないなら、17:25 ダビデの王座に着く王たちや、車や馬に乗る首長たち、すなわち王たちとその首長たち、ユダの人、エルサレムの住民は、この町の門のうちにはいり、この町はとこしえに人の住む所となる。17:26 ユダの町々やエルサレムの周辺から、ベニヤミンの地や低地から、また山地やネゲブから、全焼のいけにえや、ほかのいけにえ、穀物のささげ物や乳香を携えて来る者、感謝のいけにえを携えて来る者が、主の宮に来る。

安息日を守ることが、どれだけ祝福をもたらすものか、ここに書いてあります。もちろん今は、安息日は守らず、私たち教会は主の復活を記念し、聖霊が下った日曜日に礼拝に集いますが、すべてが主にある安息から始まります。この方を礼拝すること、この方がなされていることを認めるために立ち止まること、今していることをやめること、このことによって全ての祝福が来ます。それを怠っていた彼らの心に偶像への好奇心が入り込み、それで富や人間の力に頼っていく生活に変わっていったのです。

17:27 しかし、もし、わたしの言うことを聞き入れず、安息日をきよく保たずに、安息日に荷物を運んでエルサレムの門のうちにはいるなら、わたしはその門に火をつけ、火はエルサレムの宮殿をなめ尽くして、消えることがないであろう。』」

礼拝を聖なるものとしていないことによって、その結果が神殿破壊であったいうことであります。これだけ深刻な事を彼らは犯していました。

したがってエレミヤの激しい嘆きは、主の前に出ているのに、それに抗う力があまりにも強かったということです。主の前に立つということが、これだけ熾烈であるかを思います。時には、全くその集まりや仲間、共同体からも離れてしまうことがあります。けれども、主が共におられるということ以上に変えられるものはありません。